「生きるって　人とつながることだ！」を読んで

当ＨＰ記事でしばしば「生きる喜びは、人と係わり合う喜び」と書いているだけに、新聞紙上の書籍広告で書籍タイトル「生きるって　人とつながることだ！」が目に止まった。

著者名を見ると、全盲ろうの東京大学の先生であり、先生のことは当ＨＰで触れたこと（HP「雑学 BN」の書籍等読後感関係（Ｉ）、2003.11. 4.「『指先で紡ぐ愛』読んで思い出すのは……」：参照）がある。
早速、先生の最新書を購読した。

先生は３歳で右目、９歳で左目が見えなくなり、14 歳で右耳、18 歳で左耳まで聞こえなくなり、盲ろうになり、暗黒と静寂のみの宇宙空間に放り出されたような疎外感、孤独感の日々。
何よりも辛かったことは人とのコミュニケーションが極端に困難になったことだったが、そんな日常の中で、母親が思いついた指点字のお陰で、その後指点字通訳者等の多くの人の支えを受けながら大学へ進学し、今は東大で教授をしている。

先生が過去に機関誌、雑誌、新聞紙上等々へ寄稿、投稿した短いエッセイが時系列で編集された書であったし､楽天家でポジテイブ思考で好奇心旺盛な宇宙人と自称するだけに、どのエッセイもユーモアで溢れていた。

そうしたユーモア溢れる文章の中から、先生の自らの障害状況の体験・経験から得た人間の普遍的な本質である「生きるって　人とつながることだ！」というメッセージが強く伝わってくる。

我々は視覚で文字を読み、聴覚で言葉を聴くなどのように、コミュニケーションの即時性、即応性の手段に恵まれているにも拘わらず、ある人たちは「コミュニケーションは苦手」とか「コミュニケーションは面倒臭い」といいながら、一方で「誰もかまってくれない、気にかけてくれない、自分は孤独で淋しい」と嘆くのは勝手なもの。
周りに人が居たとしても、その人とコミュニケーションができないということは、自己認識もままならず、自らが生きていることも認識できないということになる。

ルソーの「人は生まれながらにして知る事を欲する」の言葉を借りれば、「人は生まれながらにして人と繋がることを欲する」ということであり、この単純・明快な人間の根源的・普遍的本質を今一度再認し、人とコミュニケーション（係わり合う）をしようとする勇気だけは、なくさないで欲しいものである。

阿部幸泰　　（2010 年 3 月 17 日　記）